

〈論文〉

ハチスン、スミス、ミラーの共和主義 ——なぜ日本で理解が困難なのか¹⁾。

田中 秀夫

要旨 スコットランド啓蒙の中核をなすのは、ヒュームを別とすれば、グラスゴー大学教授を務めたハチスン、スミス、ミラーであるが、彼らの思想の重要な要素としての自由主義と自然法は比較的理解されているとしても、もう一つの要素の共和主義は、我が国の学界では必ずしもよく理解されていない。過去半世紀の間に、『マキャヴェリアン・モーメント』(1975)などによるポーコックの圧倒的な仕事によって、ヨーロッパ近代、英米における共和主義(シヴィック・ヒューマニズム)が発掘され、理解が大いに進んだ。にもかかわらず、我が国ではいまだに共和主義認識は不十分である。それはなぜか。本稿はスコットランド啓蒙に関連して、この疑問に答えようと試みるものである。

キーワード ハチスン スミス ミラー スコットランド啓蒙 共和主義 ヒューム
オーガスタン論争 マンデヴィル 民兵論争 植民地独立

1 ハチスン、スミス、ミラーの思想の構成要素

未開で荒涼たる高地地方、民衆の貧困、1690年代の飢饉と欠乏、守旧的ジャコバイト、寛容の不足、産業の低迷などに喘いでいた武勇の国スコットランドは、イングランドに歩み寄って結んだ1707年の合邦後に急速な発展を遂げ、18世紀の中葉にはアーガイル家が政治の実権を掌握し、政治的に大いに安定し、経済的・文化的にも繁栄の時代を迎えていた。その発展を推進した思想と運動をスコットランド啓蒙という。その代表はヒュームとスミスである。小国スコットランドの啓蒙にとって、特にグラスゴー啓蒙にとって人材と徳を重視する共和主義的伝統²⁾の継承は、自然法的伝統の継承とともに重要な特徴であった。ハチスン、スミス、ミラーはグラスゴー大学の教授として、スコットランド社会の改革、そのための社会への共和主義的関与(コミットメント)の重要性を学生に伝えたように思われる。

彼らにとって *Vita Activa* (活動的生活) は *Vita Contemplativa* (思索的生活) とともに重要であった。彼らはすべての国民に政治的能動性を期待したわけではないが、啓蒙時代にあって、スコットランドの改革のために政治的能動性を貴族と上流市民に、また将来のエリートたるべき大学生に期待するというのは当然のことであっただろう。スミスには統治者のモデルと仰ぐことも可能な第3代アーガイル公爵 (Archibald Campbell, 1682-1761, Earl of Islay, Third Duke of Argyll) という改革者、共和主義的為政者がいた。公爵の信頼厚い家臣にミルトン卿 (愛国者フレッチャーの甥) がおり、その部下がケイムズ卿 (1696-1782) であった。公爵の膨大な恩顧は啓蒙の支援となった。

ハチスン (Francis Hutcheson, 1694-1746) がダブリンにおいて共和主義的貴族で開明政治家であったロバート・モルズワース (1656-1725)³⁾ のサークルに加わり、師とともにロックとシャーフツベリの哲学を研究し、植民地的隷従に虐げられたアイルランドの自由と独立、啓蒙と改革のために活動したことはよく知られている。彼はイングランドのコート派と目されるマンデヴィルの奢侈と悪徳を是認する不道德な言説 *Immoral Discourse—Private Vices, Public Benefits* (個人の悪徳は公共の利益なり) ——批判に乗り出した。ハチスンは、イングランドのオーガスタン論争に加わったスコットランドの共和主義者、アンドルー・フレッチャーや、トレンチャード=ゴードンといったカントリ派に近い思想の持主、*Radical Commonwealthman* であった。アイルランドには、オーガスタン論争の論客であり、ユニークな国教会牧師ジョナサン・スウィフト (1667-1745) という思想家もいて、『ドレイピア書簡』(1724) や『ガリヴァー旅行記』(1726) などを書いて、アイルランドの自由と独立を求める運動を展開していたが、モルズワースとは知り合っていたが、ハチスンとの交流はなかった模様である。

モラル・センスの概念に依拠して道徳を基礎づけようとした長老派の牧師でもあったハチスンは、W・ロバートスンやA・ファーガスン達、穏健派の先駆者という要素もあるけれども、ロックの自然法思想とウィッグ政治哲学を継承した屈強の共和主義者であった。彼はハリントンのような平等な農本社会を支持した民兵論者であって、独裁政治に対する抵抗権の行使を当然と考えていた。アイルランドとアメリカのために、誰にもまして明確な植民地独立論を初めて説いたのはハチスンである。

すべての政治的統一の目的は、統一される国民の全般的善であり、この善より広範な人類の利害に従属しなければならない。もし母国の計画が実力によって変更されるなら、すなわち、安全で穏やかで柔和な制限された権力から、苛酷な絶対的権力に墮落するなら、あるいはもし同じ政治構想のもとで植民地ないし属領との関連で抑圧的な法がつけられるならば、そして植民地が人口と力において増大し、自分たちだけで政治的統一の良き目的のすべてを満たすほどになるとき、植民地は服従し続けるように拘束されない⁴⁾。

母国の圧政に対して植民地は独立できるとハチスンは断言しているが、ハチスンの『美と徳

の観念の起源』（1725）や『道徳哲学序説』（ラテン語版1742，英訳1747）はハーヴァード大学やニュー・ジャージー大学などで読まれていた⁵⁾。

自然法と共和主義が何ら矛盾せずハチスンのなかにあったように、スミスもミラーも二つの伝統を継承している。

「徳・情念・商業」を枠組みとするスコットランド啓蒙をイングランドにおけるオーガスタン論争の成果との関連で理解したのはジョン・ポーコック（John G.A. Pocock, 1924）であった⁶⁾。名誉革命による国制の変革の後に展開されたオーガスタン論争の新しさは財政金融革命（Dickson⁷⁾）による社会の変化に基づいていた。オーガスタン論争は土地・商業・信用をめぐる論争としてつかまれた。ポーコック説はスコットランド啓蒙を古典的遺産以上に近代の遺産の継承者として強調しすぎだという意見もあるかもしれない。しかし、オーガスタン論争が提起した問題と議論を研究して、今や登場しつつあった新しい社会、商業社会あるいは産業社会を明確に把握し、豊かさを目指す商業社会の原理と構造を解明した新しい学問的体系、パラダイム（商業ヒューマニズム）がヒューム、スミスの経済学であった。シヴィック・ヒューマニズムはヒュームとスミスにおいて商業ヒューマニズムに転じた。ヒュームと同じくスミスはスコットランドが目指すべき未来として自由で富裕なイングランド社会に注目していた。彼らは合邦支持者であった。

道徳哲学も文明史も重要であったが、スコットランド啓蒙の新機軸は経済学であった。貧しかったスコットランドがオランダやイングランドのように豊かな国になるにはどうすればよいか。ヒントは勤労であった。スミス（1723-90）は、ヒュームの勤労と農工分業論を受け継いで、自前の資源を用いて豊かさを達成するには、労働者を分業と協業に組織し、生産性の高い勤労社会を形成することであると説いた。スミスは進歩・改善をもたらす利己心の力に注目した。これにはデフォーやマンデヴィルのようなコート派の経済論、アディソン・スティールの紳士的なポライトな経済論、師匠ハチスンの剛直な勤労論なども示唆を与えたであろうが、特にヒューム、ケネー、ステュアートたちの先駆的な経済思想から多くが吸収された。

スコットランド啓蒙において自然法と共和主義の総合として経済学が成立したというケンブリッジ・パラダイムは一つの明快な解釈として説得力があるが、しかし、スコットランド啓蒙思想家の思想はもっと多様で包括的でもあるから、ケンブリッジ・パラダイム（富と徳）に還元することはできない。

2 文明社会史として4段階理論と思想的包括性

スコットランド啓蒙にとって第二に重要なのは4段階理論 Four Stages Theory——未開から文明への人類の歴史発展は、生活様式において、採取・狩猟、遊牧、農耕、商業という4段階に分けられる——の発見である。ミークによれば、これは1750年ごろに恐らくスミスが最初に到達し、ほどなくチュルゴやケイズ卿などによっても論じられた理論であって、先行するオー

ガスタン論争には見られない新機軸であった⁸⁾。これは共和主義の伝統との関係はない。自然法思想とも直接の関係はない。これは経験観察の成果であって、様々な社会と地域の比較から生まれた理論である。旅行記や歴史書が源泉としては役立ったであろう。

様々な文明と文明社会はそれまでに知られていた。それを多様性として横並びにする分類学ではなく、縦の時間軸に並べ替えてみるということが思いつかれたのである。社会契約説をフィクションとみなした経験主義の思想家・歴史家ヒューム（1711-76）に歴史発展の思想、文明史がなかったわけではないが、ヒュームの歴史は自由への歴史であって、ヒュームには4段階理論はない。しかし、ハチスンには4段階論はおろか文明史の視野自体がなく、社会契約説があった。自然法思想から歴史的な文明社会論へとパラダイムは急速に変化していた。

スコットランド啓蒙のメジャーな思想家の思想の形成要素はたくさんあり、すこぶる包括的である。その包括性においてはスミスが抜群である。4人の思想の構成要素を一部列挙してみよう。

ハチスンはアイルランドとスコットランドの啓蒙にコミットした牧師であり教授として、まさに自然法と共和主義を駆使して社会を考察した。彼はロック的な社会契約説と抵抗権論を継受し、植民地独立論を説いたウィッグで、ラディカルな共和主義者でもあれば、民兵論者でもあった。道徳理論としては天与のモラル・センスを主張し、オーガスタン時代の著しい時代精神ともなった腐敗と戦い、マンデヴィルを批判した点が、ヒュームやスミスと違う。

ヒュームもまた自然法と共和主義を知的武器として継承した。『人間本性論』（2巻, 1739-40）において人間の本性について詳細な分析を行い、『政治論集』（1752）で政治経済分析を掘り下げ、勤労・知識・人間性が不可分の連環を形成しているとして、近代的な勤労社会を展望し、また自由の歴史として『イングランド史』（1754-62）を書いた。オーガスタン論争を踏まえて、彼は社会契約説をフィクションとしつつも、政府が国民の利益を抑圧するとき国民は抵抗権に訴えることができるとした。ヒュームは北部担当政務次官になっていた時期もあり、北米植民地と母国の対立を注視していた。その結果、植民地独立論を説いた。ヒュームは「完全な共和国案」を書き民兵による国防と元老院と競争者会議の二院制を提案した。政治理論ではいかなる国家にも権威の原理と功利の原理が不可欠であるとし、前者をウィッグ、後者をトーリーの原理としたが、両党派が過度に対立することは政情不安をもたらすので、好ましくなく、歩み寄りを期待した。彼は奢侈を擁護（マンデヴィル受容）し、為政者のシェルバーンにアドヴァイスをし、モンテスキューの風土決定論的な国民性概念を批判した。孤立を自ら味わったことのあるヒュームは、ヴォルテールなどによって排除されたと思い込んでいたルソー、フランスの啓蒙思想家のなかで孤立してしまったルソーを助けようとしてイングランドへとルソーを伴ったが、意に反してルソーのプライドを傷つけ、対立してしまった。

スミスは道徳哲学者として自然法と共和主義を継承し、勤労・分業・競争・市場の構造的把握としての経済学の体系を創出した。彼はまた文明社会史と4段階理論を駆使して経済史を創出し、地域的不均等発展を説明し、法学（権利と義務）と国制史（均衡国制＝権力分立の成立史）を講義し、植民地独立論と民兵論、奴隷解放論を説いた。名誉革命を是としたスミスは基本的に被治者の同意を重視するウィッグを支持し、文明社会における人々のモラル・センチメントの成長に期待し、ルソーの第二論文（『人間不平等起源論』1755）を受け止めてシンパシーの理論を掘り下げた。スミスは利己心を悪徳とは考えず、むしろ自己の境遇改善につながる利己心の進歩的効能を重視し（マンデヴィル受容）、時代の重商主義的な政策を批判して、自由な競争社会を擁護した。為政者ではシェルバーンや小ピットへの影響が有名であるが、スミスの講義にはアイルランドからの留学生W・S・ディクソンも連なっていた。スミスの学問的射程は広大で、法学・政治学や経済学、倫理学を包括する道徳哲学のほかに、天文学史を含む自然哲学、文学論や修辞学では文体論と歴史叙述を詳論した。未完成に終わった法学はモンテスキュー法学批判となるはずであった。

法学教授ミラーもまた自然法と共和主義を継承して文明社会史を描き、4段階理論を援用しつつ、『階級区分の歴史』（初版、1771）とイングランドと大ブリテンの国制史『イングランド統治史論』（初版、1787）を構築した。ミラーにも植民地独立論と民兵論があり、ウィッグとして改革派のフォックスを支持し、体制化したコート・ウィッグを批判した。スミスのシンパシー論を継承したミラーはルソーの原始社会賛美を空想的として批判し、またリードの保守的なコモン・センス哲学を経験主義的ではないとして退けた。W・S・ディクソンはミラーの講義にも出たが、弟子のトマス・ミュアはフランス革命への賛同者として「人民の友の会」の活動を展開し、弾圧された。ミラーもモンテスキュー風土論批判を行った。

この4人はスコットランド啓蒙の中核をなすが、それぞれの差異も大きい。ハチスは急進的ウィッグであり、真正共和主義者であるが、フォーブズの言うようにヒューム・スミス・ミラーは懐疑的ウィッグである⁹⁾。文明社会史という枠組みはヒューム・スミス・ミラーが共有するけれども、ヒュームには4段階理論はない。法曹でもあったミラーはスミスの法学の継承者であるが、彼にはスミスほどの経済理論がない。しかし、ミラーは共和主義的改革へのコミットメントではスミスより行動的であった。

ミラー(1735-1801)は共和主義的教授として著名であった。ルソーはスミスにとっては思想的に重要であるが、ヒュームもミラーもルソーの思想から影響は受けなかった。ルソーの『エミール』（1762）はやや先輩のケイムズ卿（1696-1782）やモンボド卿（1714-99）に影響を与えたが、その思想的影響は深いようには思えない。ミラーはルソーの思想とレトリックに懐疑的であった。本質的な次元でルソーに取り組んだのはおそらくスミスだけであった。

ホントが最期に注目したように¹⁰⁾、『エディンバラ評論』第2号に掲載された「編集者への手

紙」のヨーロッパ学会展望において若いスミスはルソーの第二論文『人間不平等起源論』(1755)を重視している。スミスはルソーとマンデヴィルに共通する思想をみた。ルソーが最も悲観的だが、しかし三人は商業文明のアンビヴァレントな把握で繋がる。またスミスはルソーの未開人賛美、Primitivism をアラン・ラムジーが歌う農村生活の魅力と結び付けて是認した。

スミスにおけるルソー問題はイグナティエフ¹¹⁾、ホントよりはるか以前に内田義彦が論じた¹²⁾。内田はルソーの文明批判を受け止めて、文明の危機に経済学という処方箋を書いたのがスミスであると主張した。ルソーの自己愛 (amour de soi) と同情 (pitié) は、やがてスミスの利己心 (self love) と同感 (sympathy) に铸直された。ルソーの革命的な『社会契約説』(1762)は概してスコットランド啓蒙においては注目されなかった。

モンテスキューも権力分立論、政体論、風土論が注目されたが、ヒュームが代表的だが、スコットランドの哲学者は概してモンテスキューの思想には批判的であった。

3 スコットランド啓蒙の共和主義

ハチスンからミラーまでの社会思想家、道徳哲学者の思想は自然法思想と共和主義という大きな共通の枠組みがあるものの、それぞれ大きな差異もみられるというのが事実である。しかし、いずれの思想家も広い射程を持っていたことは確かだと思われる。彼らにとって共和主義の遺産は、一部を形成するものに過ぎないとはいえ、重要な思想構成要素である。特に彼らの思想のうちカントリ的要素を形成したものは共和主義である。

言うまでもなく、スコットランドの共和主義者として有名なのはアンドルー・フレッチャー(1655-1716)である。ルネサンス以来の商業の発展による社会の変化、文明化を認識していたフレッチャーはイングランドと対抗した誇り高い愛国者であった。彼はイングランドとの統合的合邦に反対して、スコットランドの独立を守ろうとした政治家であり、議員であり、思想家であった。1698年からイングランドで始まる常備軍論争に民兵論を投じたのがフレッチャーであった。国王が強大な常備軍を持つことは、自由にとって危険であるというのが、カントリ派、共和主義者の認識であり、共和主義者は民兵を是とした。フレッチャーに近いのはファーガスンかもしれない。

1707年の合邦に貢献したイングランドのコート派のジャーナリストで文筆家のデフォー(1659-1731)は、封建的民兵のような組織は現代の進んだ武器と装備をもってする国防にはもはや時代遅れであると主張した。しかし、地域社会を自衛するには正規軍でなくても役に立つというのが共和主義者の反論であり、フレッチャーの遺産に学んだ啓蒙世代のW・ロバートスンたち穏健派は45年のジャコバイトの乱において自ら民兵となってエディンバラの防衛にあたった。

常備軍はブリテンの自由の脅威であるというカントリの激しい反対があったにもかかわらず、オーガスタン時代に常備軍は戦争ごとに増強された。「議会における国王」あるいは均衡国

制という名誉革命体制は維持されたものの、政争は激しく戦われ、ウォルポール時代を含めて政情は安定しなかった。オランダ、スペインに続いて、カトリック大国フランスの脅威もあった。したがって、平時の常備軍は不要であるというカントリの主張は無視された。ウィッグ政権の大ブリテンは18世紀の半分は対外戦争を進めた。1756年からはアメリカ植民地において英仏7年戦争が始まった。おりしもスコットランドで民兵論争が開始され、運動組織としてポーカー・クラブが結成される¹³⁾。ファーガスン、カーライルなどが熱心であった。スコットランドの国防は手薄になっていた。彼らは議員を通じてスコットランド民兵法案を上程したが、採択されなかった。

争点は①国防は正規軍によるべきか、あるいは②民兵軍によるべきかという単純なものではなかった。③正規軍だけでよいか、あるいは補助軍として民兵を活用するかであった。①はコート派、②はファーガスンらポーカー・クラブの会員、③はスミスである¹⁴⁾。スミスもポーカー・クラブに加わっていたが、独自の見解を持っていた。ケイムズ卿もまた独自の民兵論を提出した。彼らは多かれ少なかれジャコバイト軍の数度の蜂起・内乱を経験していた。

政府軍に対決したジャコバイト軍の実態は民兵であった。やがてアメリカ独立戦争ではブリテンの正規軍に対決したアメリカの民兵（ミニットマン）の活躍が勝り、民兵が弱いとは限らないことを証明するが、その認識をスミスとファーガスンは持ちえたであろう。したがってデフォー説が正しいとは言えなかった。『国富論』のスミスは規律なき常備軍は民兵軍とかわらないとみていた。スミスは常備軍だけでは高くつくので、民兵制を併用すべきとしたが、誤解された。

産業革命はまだ始まっていなかったが、ジェームズ・ワットはスミスの知り合いであった。時代は商業文明、商業社会の時代となっていた。法学や政治学では社会の実態もダイナミズムも十分に把握できなかった。しかし、経済学を十全に構想できたのは、ヒューム、ステュアート、特にスミスにとどまった。ハチスンやケイムズ、ミラーにも経済論はみられるが、体系的な経済構造の分析を試みたのはヒューム、ステュアート、特にスミスであった。

スミスの『国富論』は経済学を生み出した。主権者と国民を富裕にする方法の研究がメインテーマであるが、4段階理論を駆使できたスミスは経済分析を文明社会論として多面的に行った。スミスの議論は共和主義的要素を抜きにしては完成しなかった。植民地抑圧・重商主義政策への批判、特権的商人と為政者の癒着批判はカントリの言説であり、共和主義的な議会改革を要請するものであろう。正規軍の肥大を避けて民兵軍で補完せよという提案、青少年の教育と労働者の道徳に対する民兵制の効能論、既得権がもたらす怠慢批判、自己改善意欲、競争の重要性の指摘にも、共和主義思想の刻印がある。

4 なぜ日本の研究は共和主義に注目しないのか

ケンブリッジ・パラダイム、すなわちスコットランド啓蒙における自然法と共和主義の総合

としての経済学の形成というケンブリッジ学派が提起した把握¹⁵⁾は、英米では理解され多くの支持を得たのではないかと思われるが、日本では支持されたのだろうか。そうだとすると、日本における共和主義の伝統の希薄さ・弱さが十全な理解を妨げていないだろうか。ペリー提督の砲艦外交によって開国を余議なくされるまで、日本は250年間の平和を楽しんだ。産業が栄え、港町や街道筋は豊かになり、お伊勢参りが娯楽になった。武士は治安維持を旨とする官僚になった。

『国富論』は刊行後半世紀以上たった1840年代に日本で初めて福沢諭吉（1835-1901）の弟子の田口卯吉（1855-1905）によって読まれたと推定されている。『道徳感情論』は第二次大戦中に読まれていたが、最初の読者はわからない。両著作はそれぞれ経済学と倫理学の著作であり、そこにみられる共和主義思想は19世紀と20世紀前半の日本で気づかれることはなかった。

19世紀末の自由民権運動で共和主義という用語が登場したことがあったが、消えてしまったとされている。中江兆民（1847-1901）はパリ・コミューンに出会っていたから、フランスの共和主義を知っていたと思われるが、兆民によるルソー紹介は社会契約の思想にとどまった。自由民権運動のなかでモンテスキュー、ヴォルテール、トクヴィル、ギゾー、コンスタンなどフランスの政治思想文献が積極的に翻訳された。1877年にルソーの『社会契約論』の邦訳が刊行されたが、兆民の訳は1882年刊行である。こうした文献は共和主義的要素を含むけれども、どの程度読まれたかは定かでない。また西洋における共和主義のキャンオンが日本に共和主義として輸入されたかというところではなかった。

1860年に咸臨丸でアメリカに渡った福沢諭吉は、ウェイランドの経済学と道徳哲学に出会った。1871年にヨーロッパとアメリカに派遣された岩倉使節団は多くの書物に出会っている。木戸孝允はモンテスキュー『法の精神』に出会った。木戸は何礼之に英訳から翻訳させた。それが有名な『萬法精理』である。それは自由民権運動のなかで自由主義と民主主義を知るために広く読まれた模様であるが、共和主義文献として読まれたようには思われない。

江戸時代はオランダから西洋の物品が入ってきたが、書物はわずかであり、グロティウスでさえもたらされなかった。西洋の書物が大量に輸入されるようになるのは19世紀の半ばの開国と明治維新以後のことである。スミスもミルもスペンサーもほぼ同時に入ってくる。けれどもマキアヴェッリ『リウイウス論』（1517）もハリントン『オシアナ共和国』（1656）も、またモンテスキュー『ローマ盛衰起源論』（1734）も、その他の共和主義の文献と同じく、第二次大戦以前にはほとんど読まれなかった。1920年代に第三インター、コミンテルンの指導で日本共産党ができ、マルクス主義が影響を及ぼすと、共和主義が登場する余地はなくなった。

室町時代には堺のような自治都市が生まれ、長く栄えた¹⁶⁾から、事実としては共和主義に相当する実践があったとも言えよう。しかし、共和主義の語彙がなかった。ペリーの砲艦外交まで、日本は250年の平和な時代を享受した。士農工商の身分秩序、封建道徳が人々を縛ったから、自由だったわけではない。しかし、平和が富、商業や文化を生み出したことも確かであって、江戸時代に日本のルネサンスを求める歴史家もいる¹⁷⁾。自治的な村落共同体の生活にはい

くらか共和主義的要素があったかもしれない。スミスより20年先輩の安藤昌益（1703-62）¹⁸⁾は秋田の地にあって農業共和国（Agrarian Commonwealth of Japan）を夢見ていたかもしれない。

しかし、強固な秩序を構築した徳川封建社会は武士が支配する官僚制であった。町や村の一部の自治は合意による統治として民主主義のルーツとして概念化されたとしても、共和主義の伝統とは考えられなかった。第二次大戦後にも共和主義を名乗る政党は生まれなかった。我が国に共和党も共和国も生まれたためしはない。それには天皇制が制約になった可能性も考えられる。戦後の日本共産党は天皇制の廃止を提唱していた。その意味で共和制が語られた¹⁹⁾。しかし、一般には広がらなかった。天皇制に対立する政体が共和制であるということで、共和制は禁句になっていったように思われる。こうした経験の結果、いまだに共和主義とは何かということが我が国では問題になる。

アメリカの共和党は今では馴染みがあるが、これが18世紀の思想家たちの共和主義と直接の関係がないことは言うまでもない。後者は当時のトーリーの保守主義と対決した改革の思想であったことからすると、正反対のものであるかもしれない。

共和主義は一部には20世紀後半の市民運動をへて今日のヴォランティア運動、NGO活動、コスモポリタニズムに流れ込んでいるのかもしれない。学界では「学問共和国」という言葉が普通に使われている。それは共和主義の精神をいかほどか連想させないだろうか。丸山真男（1914-96）や内田義彦（1913-89）などの戦後啓蒙派の市民社会論は、個人の自立、主体性を説いた。それは共和主義に近い要素をもつと思われるが、彼らは民主主義として語った。権力を批判し、腐敗墮落を告発して、良き社会を創るという市民的行動は我が国にもさまざまに見られるし、市民的徳 Civic Virtue を育むであろう。しかし、現代日本は西洋やアメリカと違って、与党が自由民主を掲げ、野党もまた民主を掲げる国であって、共和主義の言語が活用される国ではない。それは日本の独自性であって、与党にも、野党・カントリにも程度はさまざまながら公共精神がないわけではないが、共和主義を標榜することはない。そもそも幕末明治維新以降だけを考えても、自らの徳によって、あるいは公共精神をもって社会改革に貢献しようという人材がなかったはずがないのである。もっとさかのぼれば近江商人の「三方よし」の思想をあげることもできる。現代では自発的な公共精神の湧出は災害ヴォランティアなどにも明らかに見られる。やがて共和党を名乗る政治勢力が登場するかもしれない。その時には、18世紀の共和主義を改めて参照することができるだろう。

注

- 1) 筆者は来春の東京（東京大学経済学研究科）で開催される予定の国際アダム・スミス学会（2020年3月15日～17日）においてこの主題で報告を行う予定であるが、本稿はその日本語版である。
- 2) スコットランドにおける共和主義の系譜については、筆者の「スコットランドにおける共和主義の伝統とフランス革命論争」、田中秀夫・山脇直司編『共和主義の思想空間』、名古屋大学出版会、2006年、を参照されたい。

- 3) 以下を参照, Caroline Robbins, *The Eighteenth Century Commonwealthman*, Harvard University Press, 1959. (田中秀夫訳『18世紀のコモンウェルスマン(仮題)』ミネルヴァ書房, 2019年)
- 4) Francis Hutcheson, *System of Moral Philosophy*, Vol. II, 1755, p. 308.
- 5) Caroline Robbins (April 1954). "When it is that colonies may turn independent:" an analysis of the environment and politics of Francis Hutcheson (1694-1746)", *William and Mary Quarterly*, 3rd Series, April 1954, 11-2.
- 6) John Pocock, *The Machiavellian Moment, Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton University Press, 1975, Chaps. 14 and 15 (田中秀夫・奥田敬・森岡邦泰訳『マキアヴェリアン・モーメント』名古屋大学出版会, 2008年)を参照。1720年代末から1730年代初頭にかけて、ロンドンとウェストミンスター議会を訪問したアングロマニアのモンテスキューとヴォルテールの社会思想も大いにオーガスタン論争に啓発されたのではないかと思われる。
- 7) P. G. M. Dickson, *The Financial Revolution in England. A Study in the Development of Public Credit 1688-1756*, Macmillan, 1967.
- 8) 特に Ronald Meek, *The Social Science and the Ignoble Savage*, Cambridge University Press, 1976 (田中秀夫監訳, 村井路子・野原慎司訳『社会科学と高貴ならざる未開人』昭和堂, 2015年)。
- 9) Duncan Forbes, "Scientific Whiggism - Adam Smith and John Millar", *Cambridge Journal*, 7, 1954. Do., "Sceptical Whiggism, Commerce and Liberty", in Skinner, Andrew S. and Thomas Wilson eds., *Essays on Adam Smith*, Oxford: Clarendon Press, 1975. Do., *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge University Press, 1975.
- 10) Istvan Hont, *Politics in Commercial Society*, Harvard University Press, 2015.
- 11) Michael Ignatieff, *The Needs of Strangers*, Viking, 1984, (Penguin, 1986) (添谷育志・金田耕一訳『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』風行社, 1999年)。
- 12) 内田義彦『経済学の生誕』未来社, 1953年。
- 13) 詳細な研究は John Robertson, *Scottish Enlightenment and the Militia Issue*, John Donald, 1985. ポーカーはストーブの火をかきたてる火かき棒。
- 14) 民兵論者であったスミスは『国富論』で常備軍支持に転じたというのが通説だと思われる。しかし、この通説は疑問であり、私見によれば、スミスは常備軍を主力とし民兵軍を補助とするという組み合わせを是としていた。国防には規律ある訓練された正規軍が一番強くてよいが、財政負担が大きくなるためには民兵を補助的に活用すべきであるとスミスは一貫して考えていたように思われる。
- 15) Istvan Hont and Michael Ignatieff eds., *Wealth and Virtue - The Formation of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, 1983 (水田洋・杉山忠平監訳『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』未来社, 1990年)
- 16) 国際貿易が盛んになった室町時代(1336-1573年)に、堺は濠をめぐらせ、外敵の侵入を排除する自治都市として栄え、統治は「会合衆」(有力商人)が担った。
- 17) 福本和夫『日本ルネッサンス史論』法政大学出版局, 1985年。
- 18) 日本で安藤昌益を発掘した(1950年)のはマッカーシーの赤狩りの犠牲者ハーヴァート・ノーマン(1909-57)であった。
- 19) 清水幾太郎はこう述べた。「戦後の「価値体系」・・・戦後の「大義名分」、それは、「治安維持法への復讐」にあるような気が致します、是が非でも、天皇制を廃止して、共和制を実現しよう、是が非でも、資本主義を廃止して社会主義や共産主義を実現しよう、これが、戦後思想の二大公理であるように思われます。」竹内洋『清水幾太郎の覇権と忘却』中公文庫, 2018年, 324頁の引用より。